

ユニバーサルツーリズム時代 「特別なバリアフリー」から「あたり前のバリアフリー」

後藤 秀和 NPO 法人 自立支援センターおおいた

1. はじめに

(※以下、バリアフリー=BF, ユニバーサルデザイン=UD)
これまでは「BF=福祉」から、これからは「BF=福祉+観光」を意識した、ものづくり・人づくりが重要だと考える。2025年を境に65歳以上の人口が30% (3,657万人)以上となる超高齢化社会を迎える。又、障害者数は7.6% (964.7万人)であり、併せると人口の約40%にあたる、4,603.7万人が高齢者・障害者となる。

2. 障害者・高齢者・ダイバーシティ

現在、「障害者差別解消法(合理的配慮等)」、「改正バリアフリー法(交通アクセス及び施設のBF化)」といった法律により、障害者の社会参加保証は大きく改善されてきている。ダイバーシティの理解も進み、いわゆる少数派の意見であっても同化、多様性が尊重されるようになってきた。しかし、ここで考えるべき点は、「高齢者及び障害者は少数派なのか?」という事である。前途に述べたように人口の約40%が高齢者・障害者となる。この統計を見ると、既に少数派と言えるのか疑問が残る。よって、バリアフリーは「特別な方への配慮なのか、当然の設備?」という考えが必然的になってくる。今後は、誰もが対象者(当事者となる。又は携わる方)になる可能性が高いと言える時代。今までの常識に固執せず、見方を変えていく事も必要と考える。

3. 地域のBF調査を通じて見えてきたもの

現在、大分県内約300ヶ所(宿泊・飲食・観光)等のBF調査を実施している。当団体は、日本バリアフリー観光推進機構に加盟しており、機構が推奨する「パーソナルバリアフリー基準調査」を用いている。完璧なBF施設の情報を追求するのではなく、バリアになっている場所を含め、ありのままの施設情報を発信するというものである。障害は様々で、歩けない人もいれば、少し歩行できる人もいる。全く見えない人もいれば、ぼんやり見える人もいる。少々のバリアがあっても、障害によっては利用できる施設も沢山ある。情報があれば、その選択肢の中から選ぶことができる。悲しいのは選択肢が無い事である。現在、当バリアフリーツアーセンターが発信している大分県内のBF情報は1,000施設を超える。特に調査で感じた事として「座敷席を利用していない」状況を多く目にしてきた。手前がテーブル席、奥が座敷席という施設。全てのテーブル席に高齢者が座っており、座敷席は誰一人利用していない上、座敷席のスペースが1.5倍は広い。比

率を変えれば集客率がアップすることは間違いないと言える。他にも、小上がりの座敷席(畳部屋)の中にテーブル席を並べているお店も多く見られた。話を伺うと、昔からの常連客が高齢で膝や腰が悪くなり、立ち上がりが辛くなった。家族連れの中に車椅子の方がいる等、既にそのような状況を目の当たりにし、臨機応変にスタイルを変化させている施設も多く見られた。お店の拘りも必要だと思うが、利用者のニーズによって選択(テーブル席、カウンター席、座敷席等)できる施設づくりが、集客に影響してくると思う。例えば、3世代、6名の観光客が食事をするとした場合、車椅子のお爺ちゃん1人を残し座敷席のみのお店に入る事は考えにくい。結果、6人のお客様を逃している事になる。これからは、そのように視点を変えていく事も必要である。

4. まとめ

冒頭に述べた5人に2人は障害者又は高齢者という時代が来る事は想定ではなく事実である。一家族に障害者又は高齢者が居ることを前提とした受け入れの体制づくりが必要と考えられる。重要なポイントとして、障害者・高齢者が一人で旅をするといったケースは少なく、例として、祖父母、子供夫婦、孫といった3世代旅行も増えてきている。現在は体に不自由を感じていない高齢者も多くいると思う。しかし、2025年はスタートであり、2040年には2,179万人の方が90歳以上の高齢者となる。この15年の過程の中で着実に年齢は進み、今は元気で徐々に体に不自由を感じてくる可能性は高い。最後に、「体が不自由でも旅行に行きたい!」と思えるには?をテーマに各施設で考えて欲しい。自分自身の体が不自由だったら?大切な家族の中に車椅子を利用する方がいたら?そして、出来る事から少しずつ「特別ではないバリアフリー」を進めて欲しいと願っている。大切な人と一緒にいつまでも旅を楽しむために。

